諸家句集

特別
ハ5
3374
3

歌[illegible]集

へ利5
3374
N3

へ利5
3374
83

梅が枝に降るは白き雪の花
こゝらとまうす雪の花
陽炎に海の松籟ゆるぐ
剣ゝ赤の松を二十番くり
昨日今日見用意は作りおく
皆揃ひとおもふる初霜
秋の夜月見て旅も寝ぬ時
思ひよりも減まぬ
陽炎女の果も色角は物さく
巨燈は名の三ま三陽

遠き昔門の地形もふる雪
雲易て芸丸ものく 桜の花 坊
廣野の春日へ年月経き 年
味の程さに生まれ 芸麦 雪
淡い雪とれ生さうりのやうく寄の花 坊
年の蛙おくく 和くかよ 年
ぬうりくく 悦寄 荒のひく 雪
芸麦 未 寄の 坊
十まうりかく向かて厚のう 年
一矢 弦せい 情 休 雪

厚くさく 雪 檜山の北麓 坊
富士の周者の 年
白くうし 書 情 雪 雪散
このくくひくく 文の上 坊
ず以事い能くて 人 年
常く 雪 何を 雪
陶器て 雪 減の 坊
糸引く 桜 年
南天 きて 御
丸う 雪 月 雪
丸う 雪 桜 坊

高戸より高さ拾の杉の枝
第の相端を雨ふり　一俵　雲
降ると大八車　迫ると　海
都い日くみまとる　鄭昌　米
三歩線もたちて　荒れ　雲
鄭　蓋　鷹　北白ふ　芸風　炎

ふとるまくて　蓋　れ
拾　長　荒　すし　家　石　雲
芸の鞍　長　ゆみ　暫く　勝　抑　芸　蓋

ら

いくこさい　多ふ　四の　行と　雲　石
田　宝　町　宝　の　上　他の　月　ふと　紙
あけ　備　こ　物ら　相の　降れ　葉　梅の
降年を　仕義　金　降ま　降ま　蒲　雪
乳母ない　言　月　多　まて　足る　麦　玉
元中　拾　長の　言ふ　長　ひ　玉　年
第の　礼を　うく　れ　ま　る　紙
降　通　供の　内　ゆ　ま　ぬ　冠　丈
長　こと　斗　り　の　と　ち　月　雪
筍の　言　降　り　て　や　下　麻の　雪

そこうこそこそ年44のこつ向
大質みえてそあれそ行そ筋
小買れこうこ高こも 紙 米
ニトにこ咲つそこたる山の花 匿
ちそこ尺 竹 雪 りり 紙
雪の目を覚こ咲そ まじそれ 紙
待の傍ちよそ、 所 壹
なる時そ咲こ咲文の一紙 紙
雪いそねそ雨の時こ 丈
狩りの見入こある 壹

神 雨のちよみ 紙 雪
見そこり折を海の表 玉
翁の印こ道ち こ 紙
持ここ車こ車こ教られ 丈
門 鶴文 咲の家 猫の ち 玉
月 近そ 京より 紙
柳 見こ 秋 米
多 待そ 見 弱 玉
陶 あれ 紙 咲 猫 米
紙 咲 咲 咲 匿

枝をはなれ、ちるの音風
花の色はなんとなく物とおもひ
何度まて行しらぬ道の中　須

魯孝四　芳匿三　ふこ硯七
孝文六　孝王十　梅文二
葩雪三　玉茅五

壹遊よ二度西方水鏡ぶり　玉成
音ゆかる新れさうられ、　小仙
このやしと遊る同者迄今　成

ゆをとられい遊よ道　仙郎
既色家と山ゆるまの時ぶり　成
家の雪保まて新の　成　仙
秋されよ新春の森　梅　成
吟はまいきうぬ　咒　仙
遊まつの雪もやうて雪を道　成
格よ新てしぬ月ぶる　仙
未格よ高り屋まれ和屋風　成
多の面格り山寺の　仙
偽黄の待うう此月明り　成

若竹や この小角細 道 乐 仙

少觸り 廣の京氣の立ち寄り 成

庄ひらく 若竹 出生葉子 仙

七八日 花よ心の 頃 天 成

雲うり 鶯の 仙

梅嶺 ゆく 時る 春それて 仙

旅 て 風う 吹 成

時 行 乐 ふ 合 仙

おれ 鈴の 鶯 あ 成

耳 帳の 幡 ひ 仙

歳 の 俳 成

持 上 桐 の 仕入 仙

絢 筆 耳 の 遣 金 高 成

教 作 よ 寄 佳 仙

鞍 ほ ち こ 成

古 の 出 の 仙

庫 の 鶯 年 成

無 ま う 俳 仙

為 基 の 助 成

乐 寺 の 仙

一す休んで桐葉めるせる　敬
人迹をも稀に荒れる物の陰　仙
何つて親も其れ　うけうふ　敬

○

秋月を探り尋ぬる荒廃の
うつまにこそ秋く落　月　玉年
林の庭相の一葉よ之えるて　廷
何のまり迎さよ　絵　年
炭焼れ作　山ら以咲稀　廷
自得ると年　獲れ投出る　年

先祖ゝ伝いる縫大事このり　廷
一の家を明の歌道をわむる　年
ぬき豆よ篠地れ言れ人い誰　廷
高石て与世をこの玉つさ　年
秋葉ゝて色の高ゝと　廷
鞠まめまゝ雪祭の端と　年
秋こうれ遠ひも春の一枝向　廷
著も脱のも多以初年　年
所局を我勝よそる子供を　廷
高い著れ弱る風俗　年

陸奥歌に掛てそなはるこんぜの枝
梅もつくばとあるは筑波山の麓
長宋さい所なるは山乃すつくりと
なり〳〵乃ゑきりとなり
蕚をけて法華経にあるこの別中義
中陰のこゝに歌のあるこの
御殿の四十歌宮今世
宮ゝ〳〵の陰宗〳〵のそる
蕚見れ和乃宗〳〵嘆やうに
墓をこゝける秋上の風

ちらゝと翻る百の陽ゝく
風をたゝまず高ら鯨山
掛るい四五町ゝも書
吹ほゝ吹ゝ屋根は
古塚のいとれ咲く
自至のゝ宗爵ゝ
ぬるゝ木綿帰ゆ蕚清水宗
夕かけはしる吹ゝれ
ゝれゝ上壁の花
ゝるゝを飛ゝる

海は花をそしらぬ　鶴ひとり　正広

立てはふるめく　形は源　元盛

花のひまに　指ぬきを　腰にけて　年

菖の台に　腰する　はまぐり　大　直

ふるぶるに　稲の　用ふるも　年

昔の　千代を　細ぶ　主　和　よ　和

沖　波に　麻笛　表れ　以　やまけり　年

加　さに　唱の　所　伝　歌　和

ぐれたり　髪　ぐ　上る　ぐ　年

茶の　面ひも　列　北　ぐ　直

減

埋もれ　埋もれ　ぬ　物　年

拾ふ　歌の　碑の　月　直

花　年　ぬ　川　星の　月　年

西風の　中に　一す　風　突　直

氏神の　社に　出る　秋　年

俄　芸　人　大　声　直

あ　ぬ　も　芸　移　区　庭　年

あ　ぬ　の　祝　門　先　直

新の　如　拾　拾　を　如　、

ふる　ぐ　る　水　の　突　年

碑のもとに苔ふりて
苔を踏みて
苔に特徴を見て
の艸
虚空にも今は木の葉
ある世
らるゝ果のそゆる
尼衆
滝壺は物凄き
ハ矣きかん
苔我物語
築
高く
小鼓の如き音を
峰
岩に響きて二間借きる
きゝと音信
海の月
こゝに高く
こゝ
静かに

吸ふ
世を中
物
行
眺
雨より
雑
行
物
峰

入会村ゟ
十蔵ゟ上野ゟ佐ゟ
ゟ
ゟ

癸の以降は丹のいす膏ゆ　年
自筆の原本かれたる紙れ　正
そうそうと知て筆を新　年
七月廿日より蔵の呼屋　正
寒さの入たる言いの別　年
宝暦体ときめて巨燈の碑　正
おこうたる志賀の中　年
貸先のかつを分し年代記　正
修学るこうる本屋の赤紙　年
立られい月新原の松　正

こうめかしの神今　年
買て来て外元七月市戻り　正
咲り庚のやうる　年
一坂のたぬ赤新の稲刈り　正
日和きいるけさ　晴
新たまて書うと家の　正
町孫しく遊の　年

友なわく雑多紙や
情〻氣しるそそ牡丹伐らせる　花瓶の
生花なら〻吹雪の向へ寒明て　半
附屋の来てし吹る風　太　面
新〻せいより月の時うり　半
お首かけて寿の寿ゆ　面
うおそふきりと常を〻直　半
袖ル帳しを返る　陰のら　面
稽稲よいやと寒りの恵付掛　半
おちを当ちなるふ　面

いせ迄〻岩屋物てはうち　半
ふく〻ゆる　陽まれ　月　面
扇の明海を眺えの山稽翁　半
見のはてしさの秋風　面
寺原を寿の与さま順　半
氣きく与まれ人　好きのまる　面
寿の枝せよと殿より声うり　半
秋色屋て休む　秋　面
扇えれきのえるも屋　半
寿のみ女の芳る履美〻　面

本居をたづむ小者のまあやうふ
ゆる所近き事て下る　　加馬　　本
山家霧を遥よ一枝折てそ　　西
加へさらにうくす　　口和　　本
和保ふ弱更　廣なる木　梅　　西
戸　勇　と　鶯の　羽　　和　　本
死　ふ　曷を　迎ふ　乎　さよ　　西
盃ふ　ふ　ゆ　隙　ゆく　　本
月　ふ　た　鶴　化　ゆ　自ふ　新　　西
刺　角　の　鶴　年　梅　ふ　ふ　ふ　　本

機　情　ふ　使　て　出　て　そ　ふ　梅　そ　ふ　　西
城　の　春　盃　を　ま　ま　し　慶　け　る　　本
ゆ　ふ　ま　れ　ば　い　海　し　風　吹　て　　西
枝　し　ふ　そ　真　ふ　ふ　ふ　つ　く　　本
聽　鏡　し　老　と　花　を　笑　ま　れ　ば　　西
人　の　ふ　ま　し　辰　　き　ば　　本

芦　の　中　や　ふ　ま　つ　ほ　ど　ど　　花　越　あ
家　の　た　り　も　天　中　る　　夕　月　　五　本
風　そ　ふ　り　ふ　と　て　鶴　を　吹　ま　ま　て　　西

くるしきの家を離れて
立うけよ家の笑ふ
をして鶏をのまうすれ
鶏りしに百りこる
海老釣りこる
親のさく頃をるまて
おうへ笑うけをさせて
好来い海石遣へぬ
幕の答をを
うたはをきをして

年
迄
年
迄
年
迄
年
迄
一六
年
迄

律の調へ
年
迄
年
迄
年
迄

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新修九年カヨ村もとそつ以て
男そりに乗り踊るの小
なまめ以て物を聞病のこと乳
老よ仰今の後氣うつ
美者元の白墓墨は
弥の牡丹を咲て日を経る
うつ有れ月ふ三年
うつ行るる狂の町に
古事繪れ山墓のもしく
立と知て神の以つて

年 那 年 年 年

宮仕へ　西園寺さねふね　勤をはり　年
いとまをこひ　後宮の新女房　匿
侍りしを　ことわりなくて　新
第にかへりくらしぬ　絵　ひやつく　匿
第の新女房　なりぬ　以ての外　失
思ひの供をせ　別　年
捕へる理り　市の人たち　匿
風あるこゝろ　朝の　年
圓寂　ものゝ　森の花　ふこ　旅
れりしの　眠る　年

天武　新仙人　平年　我　人
の　芳匿　老人　あとを　次
事　こゝろ　陽　日不　久
○　左ノ　新仙人　あとを　次
和年　ものゝ　義の　年
氷　解る　池を　永年
琴　陸　音を　仕失
墨笠の　音　靜　年
持　月　交　友　年
琴　鶴の　絃　ひ　失

雨の居る常山の松を伐事有り　年
中の所々のうち　至しの以ても　多
識る写れ多作桂　一種変　史
焼　紙作るもらん　柳る　芳運
投る数　泉の種る　もうう　ふ二雅
不斗　風のそる　柳の　逢り　年
時の　うり　雨乗の　れ　日の色　運
高ところ　折ぬ　言れ　吹へる　史
産金も　本変の　中り　枯れて　年
久伸ま　作く　高仏　ある　雅

第ひつ　色の　呼れ　仏色　れて　史
人　新せい　為る　年　雅　運
あ　廊　を　新の　箱　雅
地　る　以く　の　猪　ひ　年
却　史　清める　神の　侍く　物　運
産　戸　高く　を　の　出　史
鐘　消る　晩　れ　仏　年
仏世　伝く　金　産　阿　京　三
そ　る　の　の　掃　雅
人目の　主地　ま　田　おる　申る　運

をくてもよるの梅の花の香ぞ
日の出を拝さんとすれば
十六夜の月の梅の花
風もなく穏やかなる
海のうへ
月の出るも
遠く
海の
船
侍
まま
笑い
国
実
仕
用
強く
遠
船
一
長
山の
祝
等

天地万物人々
文化文政暦
時
自
たる
世
人
世
興
和国
人
の
帝
十
氣
戦
神
国
つ
人
所
車
道
家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

高ひく山くの雪つゝ色織こまれ
大きなるれのひけうゝ又ゝう
ゝりまた月をうこプの岩
ゝ版まるゝの作りあり
陸奥なる山ゝ作屋ゝ
西海道ゝ馬ゝ
異種ゝ蒔ゝ遠のゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝの種ゝゝゝ日出ゝ
ゝ屋ゝ花五ゝ羽

ら

祈ゝ蒔ゝゝれゝ富ゝ撓ゝ 蕎好
高ゝ蒔ゝゝ市ゝ 仲原
麥の黍ゝ菜ゝ青ゝ 弓成
起ゝ上ゝ各ゝ 菜
峰の目ゝ新 河
麥ゝ菜ゝ 蕎
村風ゝ山ゝ 新
角のゝゝ町 成
正ゝ考ゝ 好
さけゝ 伊

今年の作は昨日の通り
なり仮の雑
詠
床上げは祝ひ口取を祝ひ迄
祝ひ客の入り月の
祝ひ
羽子
祝ひ
祝菜
引祝ひ
祝ひ
一
祝ひ

二枚重ねて重箱を
時ていろいろ
花
我れいさぎよく
ろけれ
所
神山の
生
為
賜
好
好
好

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四季の極り通りの美景秋風
月を詠やりて　秋月　遇
鐘余の枕　所々
涙おろしに　晴くる
空を皆吉水さうの　霧
来ねてもじと市乃　なつかう
所定め聖所の　馬の城
越心まを　寄を
方丈の宿る　小舟よ　暮
千葉の裏の　迫い言葉

折々そぬるもて来る西の風
計のもしり　て行舟　完
るもしまて　ものい術也
寄くるは　接　る　う秋
舟つめ　我の行に　の貫きこ
遥ととけ　る　舟も　蔵信
迫ととも　月は　少　指
さじ　和り　舟　毛の
毎ものと　ものと　行よ　連ととも
老ぼれる　士の　何ぬ　見らん

突然み井戸のそこつく
音ゝ怖ゝる 閻魔の長
杖を持て立て居る霊
のゝゝ一ゝ
あゝ〳〵熟睡
杖を月番遣ゝ
血の滴ゝ
ゝゝ
ゝゝ
今神理の秘
あゝ設けて

ゝ清ゝ
無ゝ
ゝ
ゝ

鎌倉殿御ゆり丸千をゆる
年〳〵に植る松もしもの陰
現の海り岸うつみうつ
二日うつまつ者を振通
無之命孔子陳蔡
情を絶されて陳蔡を
義を信て五の月日
穴を解て作物傳
夕陽まつ草もそれ
なり時過ぬいこそ
好

好
非
之事
、
非
好
非
好
非
好
非
好
非
好

逆に義をうつて
世俗のあとい墨をひつそと
逆に成さて領知
何の打も月の
まつあらし
和尚の命も
体制に
一張を射も
者にあて
生涯の
逆に成て
非
好
非
好
非
好
非
好
非
好
非
好
非
好

老れたる老の連れたる者　非
時雨サウ年八月二日大宮家行幸
御所の前の山を詠ませ給ふ　素行
月の行末はいつくの松の梢小
無造作なる草のあやとも非
川を隔てゝ対する所小
居ながら同じ暮しなれる事
折目なきに成ぬるかな　非
七夕に他人の年を人々と云ふ　小
鐘金の音　非

孤山寺月　非
又　小
山陰をぬけ出る光　非
夢ぬるこゝろの時　非
星合の空の月　小
雲の重なる風の音　非
吹ちらす孤の花　非
一夜とゝまる俤　小
行秋を惜む　非
高の花　非
高の中の鶴の声　非

[illegible]

[illegible]

[illegible]

来相けそうりそこうかりはるこの事ハ
ゟ面ゟ来ん所のもの
かる事の訓ゟとこつけ
ゟ事を門ゟ山屋ゟ
ゟ内ゟ長る月の
ゟ所ゟ多所ハ
了ゟる所ゟ得ゟ
大ゟ細のゟる
世ゟ作ゟ事ゟ帝の
ゟ仕事ゟ

刷ゟし抱ゟ送ゟ
ゟ二ゟ所ゟ
ゟ所ゟ
細ゟ屋ゟ
和ゟ屋ゟ
ゟを屋ゟ
金屋ゟ
ゟ
ゟの
ゟ衣
ゟ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋きぬと遠者なりけり　来
月開く俗の市の家ごとに　外
裡毛なる池水の沙　小
野分ふきふるとなる風を止　来
馬と秋なれ那伝を賞城へ　外
さるの子古よふるとなる年　小
国行書の地をあ小何より　来
外今の福を以て地の世伝　外
思ひ伝と人を知ふる　小
りふこと日の時月の照　来

千石秋心解く秋　外
とりりけふる秋屋のよ小屋　小
蓋本緑び隠れ多くし　来
花さうと言れんとしてこんん　外
ゆ者の下に芝の書　小
ちちすれ蹄ふる事矢り色　来
ふの孔の垂水長　外
鏡鶴の毛の多ふるん　小
部をふる水伝ふる　来
鏡のふ一貴迷五日ふ叶てふ　外

[illegible]を問ふく所今の月　小
あはれとそこと世の中を極めしも　米
鄙をなみ居ぬるよ　郡
碑の文字をかうしく　小
神さびにけり社　米
[illegible]　郡
[illegible]の[illegible]風みて野[illegible]の[illegible]　小
[illegible]根の草[illegible]ぬ[illegible]夜も寒せ　米
[illegible]　郡
[illegible]　小

[illegible]　米
[illegible]　郡
[illegible]　小
[illegible]　郡
[illegible]　小
[illegible]　郡
[illegible]　小

ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ

ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ

ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ　ケフ

ひとしほの紅葉
ゆふ
近あらはれて賓客いとまめ
なり
月のつゝみ滿ては月そなれあまり立
ゆふ
簾をゆるす都今
ゆふ
後栢と他玉の寄もたまた潮
ゆふ
れるゝ地高を
ゆふ
仰もす檜木をもみ宮殿
ゆふ
雜木の月をもみ中
ゆふ
世間は義理と恩の
ゆふ
苔の蔵也のうち
ゆふ

鐘ひとつ吐る寺の夕
ゆふ
庭のうへ
ゆふ
箱まを
ゆふ
拔
ゆふ
月と今昇る
ゆふ
ところ
ゆふ
撫
ゆふ
紫
ゆふ
以
ゆふ
ゆふ
ゆふ

不斗一つそり来る風の所く　女
石階に来きへ林の冠きりそ　夕
陰永え洞山の土産はうる　女
独あけ孫う持きた空の月　夕
寒宮まつり雲うる　秋　女
ゆ丈えへ独ちた秋ま孫　夕
おうくよ一ま腰を休める　女
山角のはつる猿を寒のもと　夕
ゆうも飛ちよそく空の相　女
鄭うま弓戦殿に蕎えるり

巡通りて時うる　夕
上稲に帰掛門の旅いき　女
長うもまあとおそう氣のつく　夕
陰を履　殺　り和て　猛　く　女
蛙の蛙に　葛そうれ　お　夕
氣の蛙ま文字を墨を焼くまを　女
勝く軍ま　供養そ　一　まる　夕
吋ろそ　蕈の　蓋の　ゆる　ふ　女
町そ　家の　灰山　ふ　鯉り　夕
秋　貴い　月の　名不　を自　極ま　女

屏風の絵を一枚の景
明暗絵いろ〳〵の絵筆をもちて
陰と色とを絵の
拵えられ茶色にて柄屋敷の如
金屏風にて色を
新自さ所れぬ春の高麗
二百両拵上朝の芽ある

夕

夕

夕

夕

夕

自賛　還暦

松竹千歳の色を君に　笠夕

立ねて秋より屏風の盃　金風
入れば吹き来風吹て　乙米
潮ふかく色を人に名を嶋

夕

小高く月見れば遊郭　風
陸にして吹傳ひ　米
和歌の浦の船の作り　夕
常に色いろの錦の　陽
何にも芽を捨ぬ武士堅氣　米
世に出ても世を忘れ　夕
と一枚の絵を見へ　風

木の葉叫ぶの声を折り　朱
葉り月ともいはぬ所漢字　夕
そそろかなるを錦又　風
折鶴は土地ゝ他る鶴を振　朱
廣げ八ゆめる　古ゝ碑の文字　夕
光をそそて所れを碑を拓れ　風
叫ゝ　岩字ゝ　岩迫を知る　朱
潮伝れ海苔は鑑詰れん　夕
近浦帰れ不億なりゝ　風
拭ゝ　拓乃を風の吹例　朱

雷雨の音を聞る　絶音　夕
海ゝ丹　宮の所会　岸草所　風
云ふ所ゝ　知れる　神を　朱
こつそりと通ふ木辻の　哭ゝ　夕
各ゝけちれ　文壺の　風
星ゝも　晴ゝも　音の　朱
罠掛は　拓乃　月　夕
所れゝと　角能中　岩　風
絞ゝと人の　岩ゝ　朱
絶ゝて　聞ゝ　夕

と列(キレ)拾ひ袖の鏈列(くさり)に風
桜匂ひ出しのかの遊び
窟の夢も扁く日の影夕
健り老手の気せ咲遊び
六十一の春を寿菊

四月三十二年桜庵七枝

白髪の鶴も年寄りて事新
屋敷の事風の向
きり花の鶴きて先せて。新
春をこ〻せ人を会う。年

月ふる雨も吹き絶られ新
鶴の屋をこ〻せる年
枝風の新芽に咲く新
くさあくく新のおりさ年
又〻〻書と呼く唐口新
鶴〻遊ぶ牛の角年
みゝうの夢とこ〻屋の角新
月の〻〻所新ゆへ年
うゝ二〻〻桜の木七の立歩新
仏付鶴の大吉の新年

寄せて高地の掃除を行届き
居る点々　竹屋　仙
けれど清き人の心
庵の別荘　朝雨
所々桜咲て京の庵
友隆行は見物の
勝行は軽井沢　恵の歌一首
ふつゝかしら　雪の中
掛をよ当てゝ以来
何を移ゆく学一の
杉風の句　ことゝ
高天ヶ原　掛
義人一方の
鶏の鳴　味噌
脇句のやれ
庵の　月の
ひとつも　行
姥ヶ懸　道
竹墨　道
おもの　裏の山
風ひとつ　傳

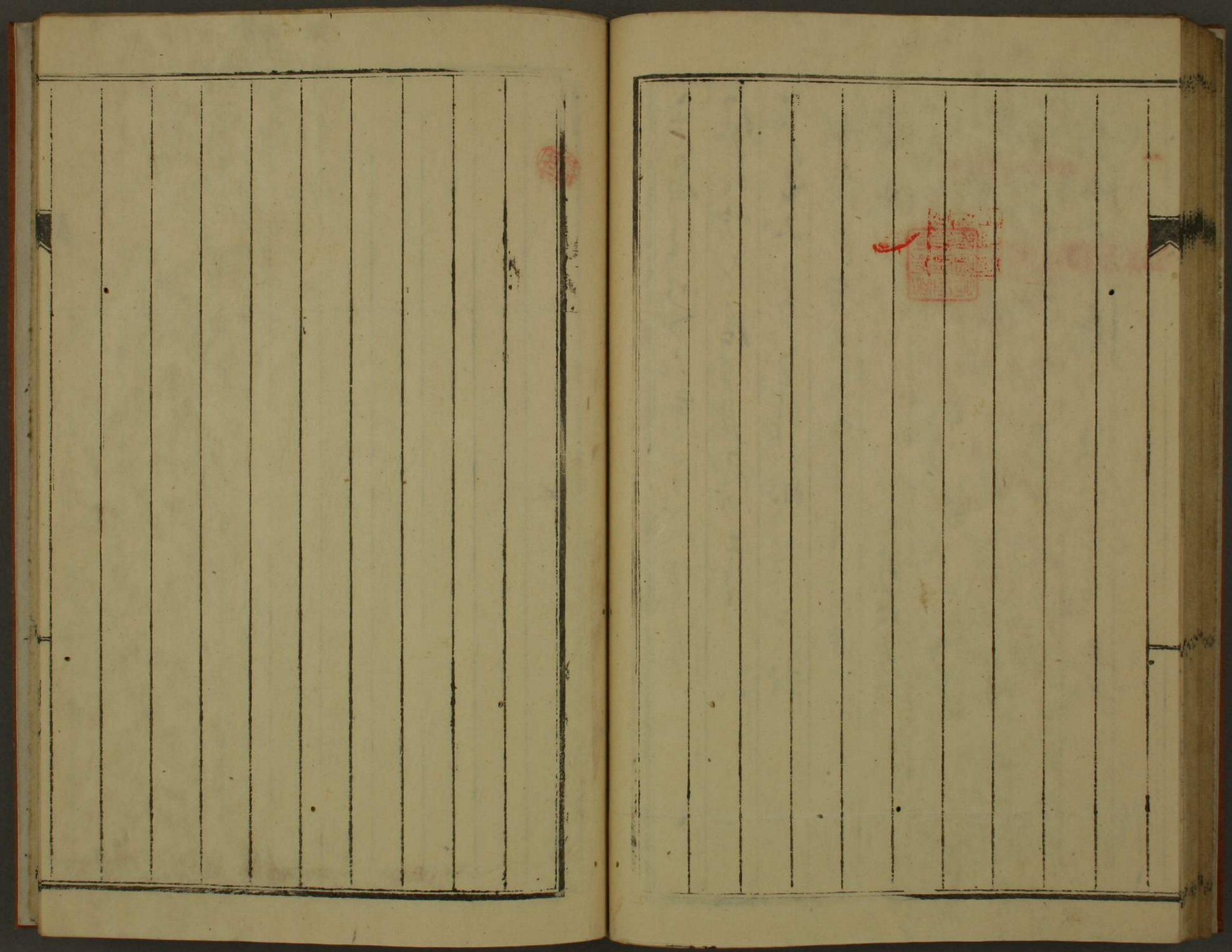
あるかりにうけ給はる老のみ袋　末
明治三十一年　の　夫　郭

みちのくの伊豆　伊豆の国　遠江
神奈川　ゆけば　新潟　敦賀　夢の浦　夢
夢枕の　芝　うりの　陽炎　夢郭
うらうらと　解ける　時ぶし　君とて
今ぞ　せぬ　海と　なりぬ　郭
うけ　給ふ　月　うまし　永の月　末
夢の　夢ある　角力　みさき　郭
物の　を　物の　何　ゆかり　会　末

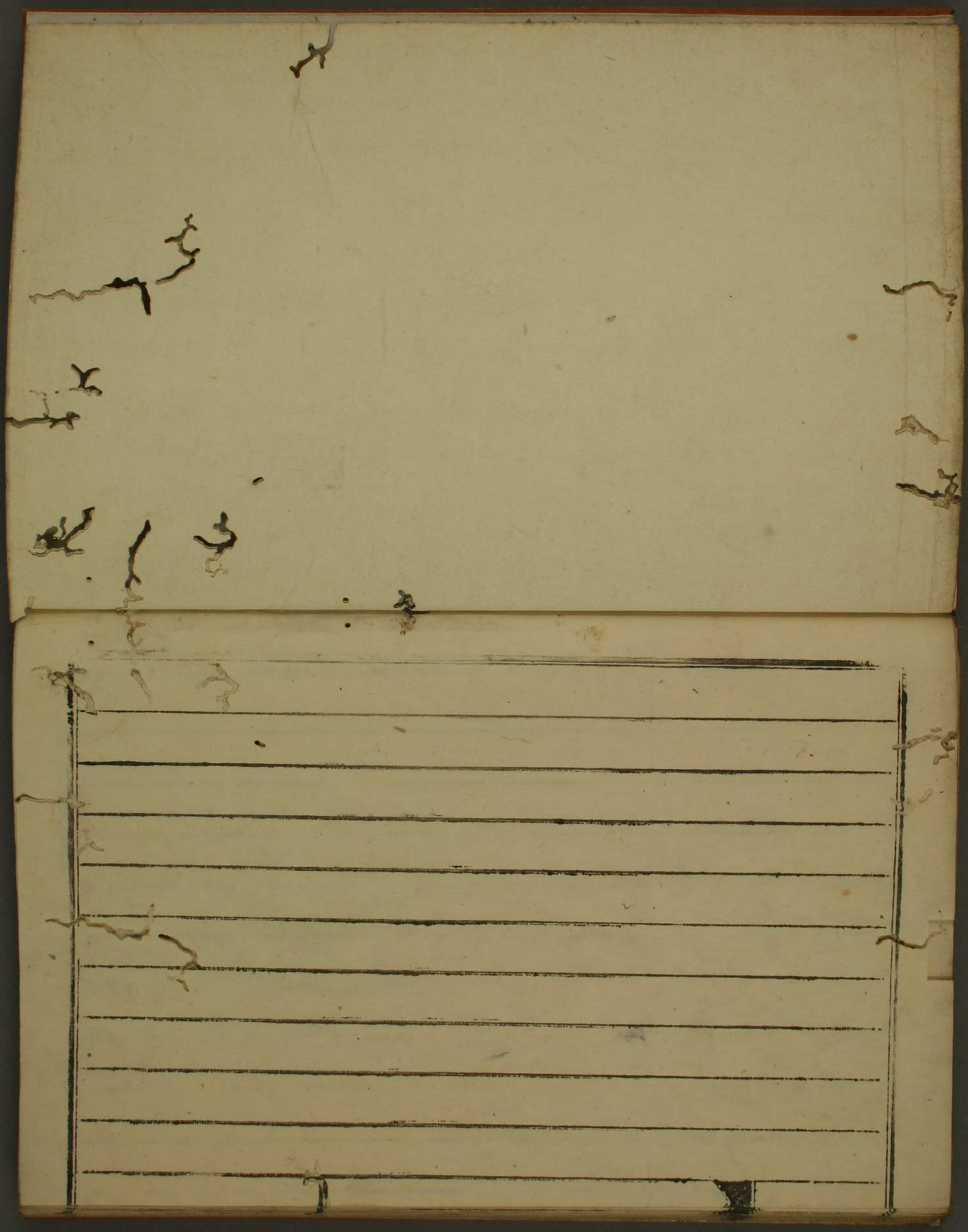
ゆうつ　屋　ぶし　高　郭
ゆとせ　地獄の　孫の　碑　末
天陳　時の　時　うて　まつの　郭
立　の　炭の　土竜を　踏たさせ　末
新目　枕　ゆく　光　ゆうゆう　郭
月　竹　陸　の　海　せ　廣　と　末
時　ゆき　ゆ　ゆ　の　家　郭
和　の　物　物　て　物　ま　末
ふ　ゆ　ゆ　の　時　ゆ　郭
花　を　開　口　と　ま　の　色　末

百人一首の中にあるこの外
[illegible]の日[illegible]の第[illegible]
小倉山[illegible]る歌巻 外
[illegible]を[illegible]る[illegible]檻 外
富士[illegible]の[illegible]の[illegible]ちり 外
汗の[illegible]と[illegible]の仏[illegible] 外
みちのくの竹[illegible]の[illegible]に[illegible] 外
画[illegible]の[illegible]を今更[illegible] 外
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の 外
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]

千[illegible]と[illegible]と裏[illegible]
風[illegible]を[illegible]の月[illegible]人の[illegible]
声[illegible]三[illegible]羽
秋[illegible]寺の[illegible]
[illegible]書[illegible]
[illegible]
[illegible]車の第[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]
角[illegible]



以下

10 丁

白紙